

正倉院の染織品の整理

尾 形 充 彦

はじめに

染織史の世界では、正倉院の染織品は上代染織の大きな分野を占めている。しかし、そのように認知されるようになったのは比較的近年のことである。今では、正倉院の染織品は、織り組織や染料や繊維素材(絹、麻、毛など)の研究⁽¹⁾が進み、墨書銘文が読まれ⁽²⁾、次第に全体像が解明されるに至っている。しかし、染織遺物の内容や歴史的由緒や伝来についての研究が進んだ背景には、大正3年(1914)から奈良帝室博物館正倉院掛において本格的に開始されて今も完了していない正倉院正倉(挿図1)に伝わった古裂の整理事業⁽³⁾がある。いわば裏方の作業である古裂整理事業が重要な意味を持つと考えられているのは、この1世紀近くにわたって、整理の進んだ範囲まで調査研究を行うことが出来たからであろう⁽⁴⁾。

正倉院の繊維工芸品が史上初めて一般公開されたのは、大正14年(1925)に奈良帝室博物館で開催された「正倉院宝物古裂類臨時陳列」⁽⁵⁾である。この展覧会は、それまでの正倉院掛における正倉院の染織品の整理事業の成果を一同に集めたもので、それ以来正倉院古裂という名が世に普及するようになったと考えられている。正倉院宝庫に伝世した古代染織資料とその整理事業が表裏一体になって今日のいわゆる正倉院裂が誕生したのであり、主要な染織品の整理によりやく目処がつき始めた今日でも、整理事業あつての正倉院の染織品という状況は同様に続いている。

以上、古裂整理事業の意義と重要性について簡単に述べた。正倉院の染織品の整理は、装潢(表具)の裏打ちの技術をもとにした技法を新たに開発して約1世紀の間連綿と続けられてきたものであり⁽⁶⁾、整理された染織品はほとんど原形のままのものかそれに近いものと、断爛や塵芥を伸ばした裂地片の2種類に分けられ、両者の整理方法が異なる。前者は、様々な架台や箆笥に納められ、後者は、屏風貼り込み(屏風装)・ガラス挟み(玻璃装)・帖冊貼り込み(帖装)・巻軸貼り付け(軸装)・箱収納(函装)に整理されており、膨大な数量⁽⁷⁾に達



挿図1 正倉院正倉

している。そして、これまでは着々と整理の完成に向かって進んでいると考えられてきた。しかし、毎年の定期点検を通して、既整理の古裂や将来の完全な修理と整理を待つ仮整理品にも新たな問題が生じていることが、今では徐々に明らかになっている。本稿では、正倉院の染織品の整理の始まりの頃から、整理方法に改善が加えられて今日に至るまでの経緯を振り返り、今日までの染織品の整理の問題点と将来の展望について考えてみたい。

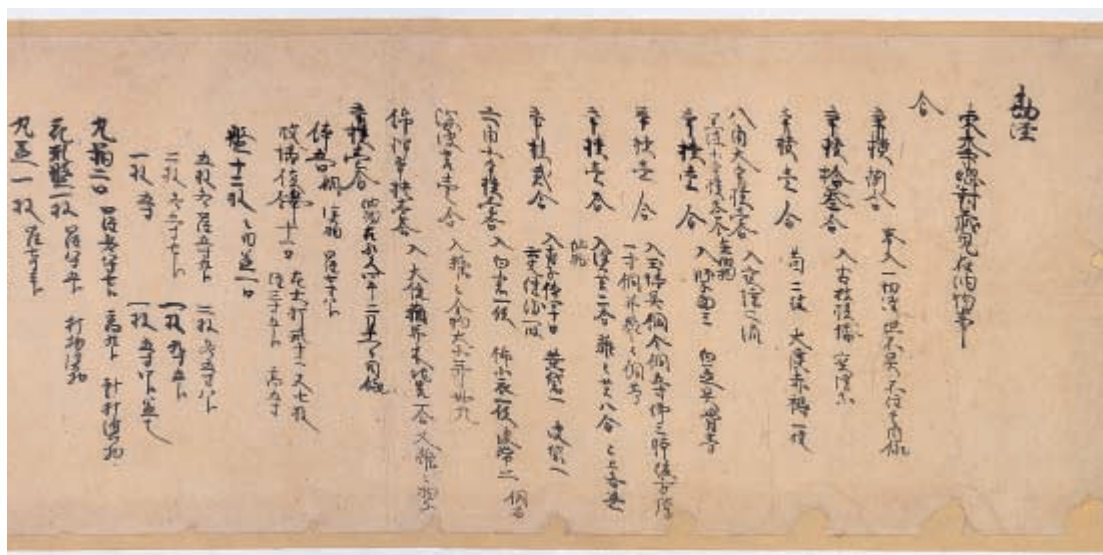
1．奈良時代から明治時代までの染織品の伝来

正倉院の染織品は、元来天平時代の盛時である8世紀の中頃に、平城京の宮廷で用いられたり東大寺の齋会や儀式に供せられたり貴族達によって東大寺に納められた染織品からなるものである。様々な経緯を経て校倉造りの正倉院正倉に納められ⁽⁸⁾、今日まで伝えられた。それらの天平時代を彩った多数の染織品は、唐櫃（挿図2）や和櫃の中に納められて正倉院宝庫の中に置かれていたが、都が平城京から平安京に移ると、ほとんど顧みられなくなったと考えられる。校倉の修理や宝物の盗難に伴う点検の時や⁽⁹⁾、寛仁3年(1019)の藤原道長に始まり、天正2年(1574)の織田信長などを数える貴顕の宝物拝見の時には、鮮やかな色彩の残る正倉院古



挿図2 唐櫃（北倉183 第54号）

裂が様々な人々の目に触れたと考えられるが、それらが再利用されたり、それらを見本にして同様の裂地が再現されるなどした記録や資料は存在しない。永久5年(1117)の『綱封蔵見在納物勘検注文』（挿図3）は、古裂類を初めて記した点検目録であるが、破損した染織品の記載があるだけである。ようやく古裂が再利用されたことを示す資



挿図3 綱封蔵見在納物勘検注文（中倉19正倉院塵芥文書第18巻）巻頭部分



挿図4 鳥毛篆書屏風 第1扇（北倉44）



挿図5 鳥毛帖成文書屏風 第1扇（北倉44）

料が登場するのは、元禄年間（1688～1704）のことである

元禄6年（1693）5月16日から8月7日に及ぶ正倉院宝庫の開封点検の目的は、宝庫の修理であった。その始末記である『正倉院御開封記草書』には鴨毛屏風の修理のことが記されている⁽¹⁰⁾。京都の大経師（朝廷の御用をつとめた表具師）が東大寺の塔頭の金珠院において修理を行ったという。

正倉院の鳥毛篆書屏風（北倉44）（挿図4）と鳥毛帖成文書屏風（北倉44）（挿図5）をみると、江戸時代風に仕立て直してあり、その時に修理されたことが知られる。ここで注目されるのは、屏風画面の周縁に貼付されている紫地唐花文錦である。これは、正倉院宝物の紫地錦覆（南倉145-2）の表地の錦と同文様のもので、同覆の裏裂と類似した形状の赤絶が何枚も残っていることから⁽¹¹⁾、幾つかの覆の裏裂を取り外し、錦を細幅に裁断して再利用したことが知られる。

天保4年（1833）の10月18日の開封は、大破した屋根の修理のために行われた。天保7年6月20日に閉封されるまで、開封期間は2年8ヶ月に及んだ。宝物は、開封後直ちに点検された

が、開封が異例の長期に及んだため東大寺の諸倉に納められて修理や調査が行われたことが知られる。すなわち、手向山八幡宮司上司延寅は、東大寺別当勧修寺宮濟範親王の命により既に画面が大破していた献納屏風の下地骨を再利用して和紙を



挿図6 東大寺屏風納櫃（北倉182）

貼り直した画面に古裂片を貼り交ぜた。この古裂貼り交ぜ屏風は東大寺屏風⁽¹²⁾と称され、長く屏風として用いられたが、下地の破損が進んだため、昭和26年(1951)~29年(1954)にかけて解体され、今では貼付されていた古裂は筆筥に納められ、屏風下地はもと通り修理されて天保時の櫃(挿図6)に納められている。

この時の開封次第は『正倉院宝物御開封事書』にあり、宝物点検目録は『正倉院御宝物目録』である⁽¹³⁾。

現在知られている平安時代末から江戸時代末までの開封点検目録だけで、正倉院宝物の伝世状況を詳細に知ることは難しい⁽¹⁴⁾。まして古裂断爛や塵芥の類について辿ることには限界があるだろう。しかし、開封点検目録に記されたものを年代順に追うことにより、次のように推定をすることは可能である。すなわち、平安時代末の永久5年(1117)の目録に破損と記されているものがかなりみられることから、その頃既に染織品の破損は進んでいたとみられる。鎌倉時代初期の建久4年(1193)の目録と江戸時代初期の慶長17年(1612)の目録には、破損が進み断爛や塵芥化していることを示す表記はみられないが、両度の開封点検では破損の進んだ染織品が納められた長持の置かれた倉が点検されていない可能性があると考えられるので、その頃既に断爛や塵芥化した染織品が納められた幾つかの長持が存在したとみなすことが出来るだろう。さらに、元禄6年(1693)の目録に断爛や塵芥化した染織品の記載があることから、慶長17年の開封点検時に既に一部の染織品が断爛や塵芥化していたとみなすことが出来る。天保4年(1833)の目録には、元禄6年の目録と同様の断爛や塵芥化した染織品の記載があり⁽¹⁵⁾、両者の間で破損の進んだ染織品の数量の違いを明確にすることは出来ないが、袈裟や衣服や茵褥など、もとの形状を留めるものと、切や古切や塵芥と記されているものとが別々の長持に納められていて、江戸時代を通じてそのまま長持の単位で伝えられたと考えられる。

2．明治時代に始まった染織品の整理

明治5年(1872)すなわち壬申の年の8月12日に維新後初めての開封が行われ、町田久成、内田正雄、蜷川式胤を始めとする人々が宝物の点検調査に当たった。蜷川式胤は多数の宝物の拓本を採取し、横山松三郎は初めて宝物の写真撮影をしている。この時の宝物点検目録『壬申検査古器物目録』(正倉院の部)¹⁶⁾によると、初めて北・中・南倉3倉の宝物の点検が一通り行われたと考えられる。同年8月23日には閉封になっている。この点検で既に襷襦化し塵芥になろうとしている染織品が多く存在することが明らかになった。その修理や整理の緊急性が考慮されたためか、数年後、明治8年(1875)の第1回奈良博覧会¹⁷⁾開催中に「塵埃」記号の櫃の古裂を東京の内務省博覧会事務局へ運んで、手入れを行い考証することが裁可されている¹⁸⁾。この時、正倉院の古裂の整理方法について具体的に検討された可能性があるが、記録がなく整理方法の検討結果もその時に博覧会事務局へ運ばれた古裂のその後の行方も明らかではない。

明治9年12月27日に、保存と研究のため「塵埃」記号の櫃数合から取り出した古裂を手鑑に仕立てて正倉院宝庫、内務省博物館、諸府県博物館に配備するという内務省の伺いを宮内省が了承している¹⁹⁾。この上申は、塵芥と化して行く古裂の保存と研究の必要性を痛感していた町田久成や蜷川式胤らが当時の内務卿大久保利通に進言して行われたとも、国内産業の育成と振興を目指していた内務卿の考えであったともいわれる。実際にどのように頒布されたかを示す記録はないが、今日東京・京都国立博物館に正倉院から頒布された古裂が収蔵されている。また、奈良帝室博物館から正倉院に納められたとされるものがあり²⁰⁾、私設の美術館や個人のコレクターの手元にも種々の正倉院の染織品が存在することから、頒布が行われたことは確かである。さらに、正倉院の袈裟や衣服(挿図7・8)などに残る切断された痕跡から、ほぼ原形を



挿図7 七條織成樹皮色袈裟(北倉1 第3号)



挿図8 呉女背子（南倉124 第43号）

とどめるものから裂地が切り取られて頒布されたことが知られる⁽²¹⁾。その真意は図りかねるが、正倉院古裂の普及に大いに役立ったことは確かである。

明治10年には、2月9日の天皇行幸にあたって宝物修理が行われた。修理は、行幸後も引き続き明治11年まで行われ⁽²²⁾、この時に一部の染織品も修理された可能性はあるが、詳細は不明である。

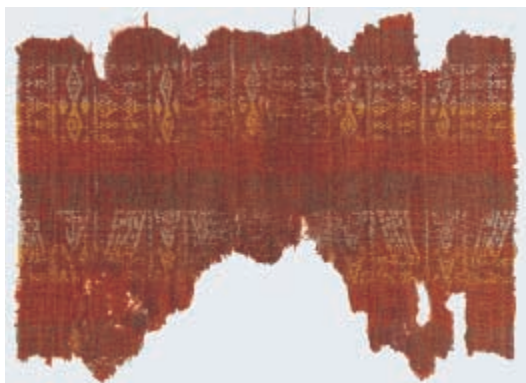
明治13年1月に時の内務卿伊藤博文の上申により、校倉造りの宝庫内にガ

ラス戸を付けた宝物展示棚が設置された。これは正倉院宝物の展示収納の始まりである。

明治15年10月から12月にかけて、当時農商務省御用掛であった国学者の黒川真頼が宝物展示棚に宝物を陳列している。その時の陳列図によれば、多くの染織品が陳列されており、色彩が鮮やかで文様が珍しい正倉院の染織品が注目を集めたことが窺われる。

明治11年2月に皇室への献納が許可された法隆寺献納宝物は、3月に正倉院宝庫に仮置された。5月にその一部が東京の博物館へ運ばれたが、残りは明治15年12月になって東京へ運ばれた⁽²³⁾。その時、献納宝物中の古裂の櫃13合のうち1合が正倉院の塵芥古裂の櫃1合と取り違えられたまま搬出されたといわれている⁽²⁴⁾。現在正倉院には様々な法隆寺裂が整理されており（挿図9・10）「法隆寺献納」と書かれた紙箋が貼付された唐櫃が1合存在する。また、東京国立博物館法隆寺宝物館には、明治に正倉院から頒布された古裂以外にも、正倉院伝来の染織品であることが確実なものが存在する。

明治25年6月に宮内庁内事課長股野琢の上申が裁可され、皇太后宮太夫杉孫七郎を掛長として宮内省正倉院御物整理掛（すなわち御物整理掛）が新設された。旧赤坂離宮内に置かれた御物整理掛では、正倉院宝物の分類整理と修理が行われた⁽²⁵⁾。染織品については、古裂を残欠、



挿図9 赤地山菱文錦（古屏風装第55号 - 4）



挿図10 蜀紅錦2種7片（玻璃装第155号）



挿図11 七條刺納樹皮色袈裟（北倉1 第5号）

断爛、塵芥、塵粉の四段階に分類²⁶⁾、裂地の伸展や裏打ち、衣服や褥を折り畳んで納め箱に収納、一部は平絹で裏打ちして欠損部を補ない、復元するような整理が行われている⁽²⁷⁾。御物整理掛で修理されたことが知られる袈裟（北倉1、挿図11）、白練綾大枕（北倉46）、御軾（北倉47、挿図12・13）、薬袋及び裏（北倉）、鏡箱嚢（南倉）をみると、古来の縫い糸をはずしてすっかり解体して、強い糊を付けて平絹で総裏打ちを行い、欠損したり弱っている部分には新しい裂地を補って、再び新糸で縫製している。例えば、袈裟などは、強い糊で貼り付けて新糸で細かく縫い付ける修理が施された表の純の部分で、今では浮き上がって分解しそうになっているものもある。このことは、純のような薄くて弱い裂地の場合、たとえ強い糊で貼り付けても経年変化により早晚分解する恐れがあることを示している。御物整理掛は、日露戦争に突入すると明治37年12月に廃止された。この時、多くの染織品と木工品の一部などの整理は完了していなかった。その整理事業を引き継



挿図12 御軾 鳳形錦（北倉47）



挿図13 御軾 長斑錦（北倉47）

いだのが、明治41年に東京帝室博物館に設けられた正倉院宝庫掛である⁽²⁸⁾。そこでは、天保の開封時に製作された東大寺屏風に倣って献納屏風の地下骨を再利用して下地を貼り替え、東大寺屏風とは異なり1扇1扇を繋がないで下地の上に古裂を貼り交ぜた屏風18扇が製作されている。これらは古屏風装の嚆矢である。

3．大正時代から第2次世界大戦終了まで

大正2年(1913)3月21日～12月23日にかけて、正倉院正倉の完全な解体修理が行われた。その間、宝物は主として新造された仮宝庫に収納されていた。正倉の修理が完了していた大正3年9月に奈良帝室博物館正倉院掛が新設されて正倉院宝庫掛の事業を引き継ぐと、10～11月にかけて宝物が仮宝庫から正倉院正倉へ還納された(染織品では袈裟や衣服など既整理のものが還納された)。還納されなかったのは、整理と修理を要する古裂や木工品などを入れた唐櫃60数合である⁽²⁹⁾。それらは仮宝庫に留め置かれ、11月から正倉院掛で古裂の整理と修理が開始された。仮宝庫に残された唐櫃中約40合は古裂類で、その内訳は、布楽服類・摺布屏風袋・屏風心布・氈心褥・褥心氈・紐心麻綱・糸幢・応永駕與丁衣袴・布幕・絹絁布氈類断爛・絹絁布氈類塵芥・塵粉などが納められた30数合(中倉202)、錦綾絹絁布雜裂71点(南倉148)の納められた1合(205号櫃)、綾羅錦繡雜貼112種(南倉179)の納められた1合(号外の興福寺古材櫃)、天蓋残欠(南倉181～183)の納められた1合(137号櫃)、幡類残欠(南倉185)の納められた5合(126～130号櫃)である。その後、大正5年には奈良帝室博物館内に正倉院御物修理場が新造されて、正倉院古裂整理事業が促進された。

大正3年11月以来行なわれた奈良帝室博物館正倉院掛の古裂整理方法は、東京帝室博物館正倉院宝庫掛で製作した古裂貼交ぜ屏風の方法(前節に既述)が踏襲されるとともに、古裂片を伸展して和紙の帖冊に貼り込む古裂帖や、和紙又は平絹を長く接いだものに裂地を貼付したり縫い付けて巻物のように軸に巻き込む軸装や伸展して破損部分を薄和紙で補修した裂地をガラス板の間に挟む玻璃装など、装潢(表具)の技術をもとにして、和紙や絹の裏打ちを基本に、正倉院掛で新たに開発されたものである。前例のない事業であり、試行錯誤もあったようで、例えば、初期の頃の古裂帖は、今と違って台紙1頁の表裏に様々な種類の裂地を貼り混ぜていて、台紙の厚みも今より薄い。それでは帖冊を開く時に裂地に負担を掛ける事にもなり易く、その後、裂地を片面に貼り台紙を厚くするなど素材や技術面の改良が加えられている。

もとの形の残る染織品として、大正9～11年にかけて大幡6旒(南倉184、挿図14)が整理された。整理方法は、縫い糸を除いて袷を解体し心裂を取り除いて、欠損箇所を染めた平絹で補い、新糸で袷に縫い直して、麻布と平絹を合わせた分厚い台裂に縫い付けて、上下に巻軸を取り付けたもので、補填による復元整理であり、吊り下げて展示することを前提にした修理が行われている(ただし、大正14年に展示された時には横に寝かせて展示された)。勅封倉の正倉から出蔵した染織品の修理を行なわれた。昭和6～7年には、献物几褥(中倉177-1、3、4、



挿図14 大幡 残欠（南倉184 第1号）

7、9、10、14、15、18号）昭和7～8年には最勝王経帙（中倉57）竹帙（中倉58、62）大乘雑経帙（中倉60）小乗雑経帙（中倉61）昭和12～14年には袈裟（南倉95）袈裟付木蘭染羅衣（南倉96、挿図15）香染純袍（南倉129 - 1）昭和14～16年には緑地浅緑目交鴈縹純間縫帯（南倉78）白綾褥（講座茵、挿図16）（南倉150 - 56）などの修理が行われている。それらの修理は、袈裟の表裏を全面裏打ちして別裂で欠損部分を補い、心などには新しい布を使用するなどして、最後は新糸で縫い合わせる、いわゆる復元修理である。ただし、献物几褥や白綾褥は平絹で裏打ちされているが、袈裟や衣服の裏打ちには丁子などで染めた茶色の和紙が用いられている。この頃から、純や羅など薄い織物の裏打ちには専ら和紙が用いられるようになった。断爛や塵芥の中から発見された純製の衣服断片が、細く切った和紙に糊を付けて斜めに又は交差させて網目状に縫いのように裏打ちが行なわれたのもこの頃である。

正倉院掛における古裂整理の成果は、大正14年までに屏風装409扇（献納屏風骨を再利用したもの340扇（挿図17）下地骨を新造したもの69扇）玻璃装82枚（挿図18）古裂帖262冊（挿図19）軸装92巻（挿図20）その他、箱に納めた諸染織品等29箱、大幡（灌頂幡）6旒に達した。しかし、それらは全て仮宝庫に納められており、一般の参観に供されることはなく、担当者以外の目に触れる機会はなかった。そのため「由緒正しく美術、工芸、考古資料として貴重な古裂類を死蔵するのは遺憾であり、保存の為に通風、曝涼する必要がある」という



挿図15 袈裟付木蘭染羅衣（南倉96）

見地から、整理済の染織品を奈良帝室博物館へ出陳することが上申され認可された⁽³⁰⁾。そして、大正14年4月15～30日に奈良帝室博物館「正倉院宝物古裂類臨時陳列」⁽³¹⁾で正倉院古裂が初めて一般公開された。正倉院古裂の復元模造が最初に試みられたのもこの頃である。

『正倉院御物図録』⁽³²⁾全18巻用の宝物写真撮影が大正13年から開始されていたが、大正14年の「正倉院宝物古裂類臨時陳列」が正倉院古裂に対する注目を集めたため、帝室博物館から原色版の上代裂図録を刊行する計画がたてられ、



挿図16 白綾襦（講座茵）（南倉150 第56号 其1）

大正15年には正倉院古裂の図録刊行計画が実行に移され、古裂類を東京帝室博物館へ移送して写真撮影された。その時、京都西陣から専門家を招いて移送する古裂の選出を行い、屏風装103扇（献納屏風骨を再利用したもの83扇、下地骨を新造したもの20扇）、古裂帖3冊、軸装3巻、玻璃装24枚、箱に納めた諸染織品14箱、明治時代に奈良帝室博物館から納められた古裂73片（ガラス板挟み48枚）を選んでいる⁽³³⁾。

写真撮影は、正倉院古裂を中心にして法隆寺献納宝物裂にも及び『御物上代染織文』（全24輯、昭和2～4年、帝室博物館発行）として逐次刊行され、昭和4年には合本されて上下2巻にまとめられた。この大型の原色図録は、大部分を原寸大としており我国初の本格的な正倉院染織図録となった（図版全150点中約140点が正倉院の染織品）。

合本刊行に先立ち、昭和3年4月14～29日には東京帝室博物館表慶館で「御物上代染織特別展」が開催された⁽³⁴⁾。

昭和7年4月23日～5月8日には、奈良帝室博物館「正倉院整理古裂第二次展観」⁽³⁵⁾が開催された。大正14年の前回と同様に「保存の為に通風を行い貴重な古裂を一般公開する」ことが目的であったが⁽³⁶⁾、古裂整理が進んでいたために、昭和7年の展観は大正14年以来過去3回の



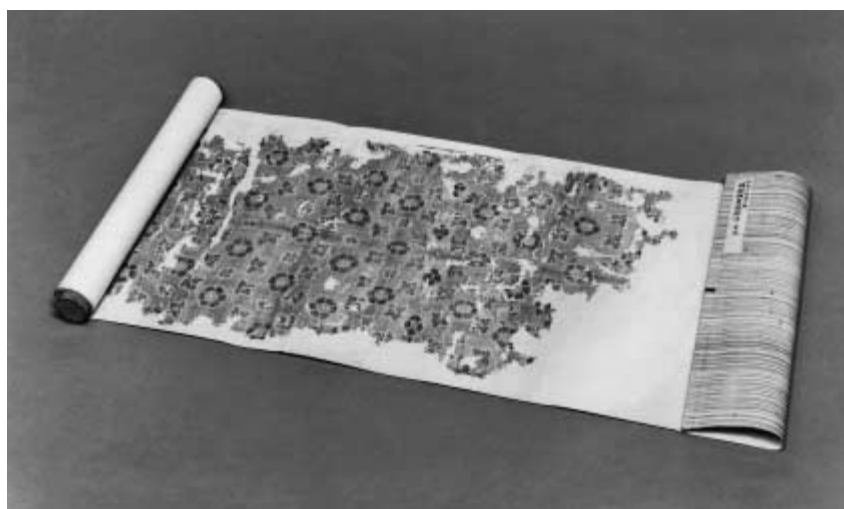
挿図17 古屏風装 第60号 第6扇（南倉179）



挿図18 玻璃装 第69号（中倉202 第108号櫃）



挿図19 古裂帖と筆筒



挿図20 軸装 第2号（南倉148 第17号）

正倉院古裂の展覧会の中で最大の規模のものになった。

昭和15年11月5日～24日には、東京帝室博物館「正倉院御物特別展」が開催された。144件の出陳宝物中に錦・綾・羅・紵・布・刺繍や、夾纈・蒔纈・絞纈など30数点の古裂類が含まれていることからみて、古裂片が注目されていたとみなすことができよう。

4．第2次世界大戦後から現在まで

昭和21年(1946)10月19日～11月9日には、奈良帝室博物館「正倉院特別展観」(第1回正倉院展)が開催され、布衣服類を中心に古裂片も出陳された。翌昭和22年5月には、正倉院宝庫と宝物の主管が奈良帝室博物館を離れて宮内府図書寮に移り正倉院構内の事務所で正倉院古裂の整理と修理事業が再開された。なお図書寮は昭和24年6月に諸陵寮と合併して書陵部となり、現在に至っている。昭和28年3月に新造の宝庫(今日の東宝庫)が完成し、同31年にはひとまず仮宝庫の宝物が移された。やがて、昭和35年5月には正倉内の宝物と聖語蔵経巻が移され、正倉院宝物の全てと聖語蔵経巻が東宝庫に収蔵された。昭和29年3月には、保存修理棟が新造され、半年後から宝物修理業務がそこへ移され、以後整理が促進された。昭和37年3月には、新造の第2宝庫(今日の西宝庫)が完成した。翌年には東宝庫の空調設備工事のために東宝庫内の収蔵品全てが西宝庫へ移されたが、同40年には旧仮宝庫の宝物と聖語蔵経巻が東宝庫に戻された。以来、東宝庫内の染織品(唐櫃内の古裂も含む、挿図21)を主な対象品として、正倉院の染織品の整理が行なわれている。

昭和22年5月以降の古裂整理は⁽³⁷⁾、およそ次のようである。

裂地片は水を付けて伸展されて(挿図25・26)屏風装・玻璃装・軸装・古裂帖・函装に整理され、布製品は架台や箆筥に納められて、大正時代以来の方法が踏襲された。そして、弱った古裂に負担を掛ける平絹の裏打ちを廃止したり、強い糊⁽³⁸⁾が裂地の表まで濃い色の染みが出ることもあり、再修理の時に取り外し難いのでは使用しないなどの技術や素材面での改良が行われた。麻製品の裏打ちに新麻布の糸目(経糸緯糸の凸凹)を型押しした和紙を使用して裏打ち紙を裂地に馴染ませる手法が考案されたのはこの時期である。

大型の裂地片を対象としていた屏風装は昭和39年で停止され⁽³⁹⁾、軸装は昭和42年で停止されるほど、裂地片の整理も順調に進んだ。継続されたのは玻璃装、古裂帖、函装である。函装に整理されている古裂片の中に、折り重なった固まりの状態のまま箱の中に置かれて、糸で縛るなどして固定されているものがある。それらの中には、折り目が筋切れしたり糸の掛けられている箇所が破れているものがあり、破損の進んでいるものから順次展開して伸展され、架台に伸展する再修理が行われている。布製品は架台や箆筥(挿図22～24)に納められた。やがて、東西両宝庫が新造されて伸展した染織品の収蔵場所が確保され、保存修理室が新造されて、大型の染織品の整理や修理に対応することができるようになると、染織品の整理が急速に早まった。



挿図21 塵芥古裂の櫃
(慶長8年に徳川家康が
寄進した長持の一つ)



挿図22 敷紙を捲った籐張りの架台



挿図23 籐張りの架台



挿図24 襪が納められた箆筒



挿図25 古裂の水伸ばし（破片を繋いで並べている所）



挿図26 古裂の水伸ばし（伸展した錦の糸目を揃えている所）

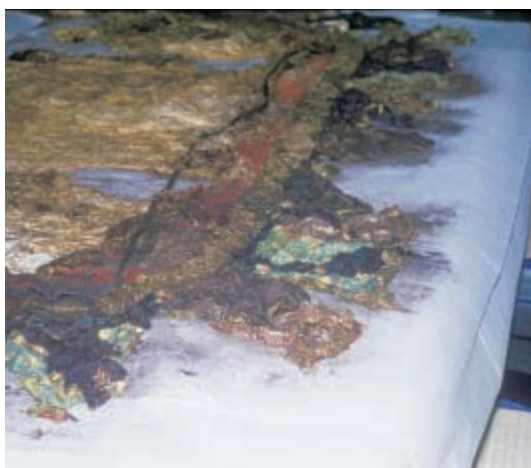
昭和37年に整理着手された幡類残欠（南倉185、第126～130号櫃）は昭和54年に一応終了、昭和55年に整理着手された天蓋残欠（南倉181～183、第137号櫃）は昭和56年に一応終了した。しかし、この時点で未整理のまま置いておく予定であった方形天蓋第19号（南倉182）を朽損するままに任せるのは残念なので、平成9年（1997）に、水や裏打ちの糊による傷みを出来るだけ少なくするように工夫された最新の維持整理を行なった（口絵1・2、挿図27～32）。昭和41年に整理着手された楽服類・衣服類その他（南倉118番以降。一部は南倉の第197、202～204号櫃納在）は昭和61年に一応終了した。昭和51年からは勅封倉（西宝庫）の染織品の破損の進行を止めるための修理が着手されているが、この修理は今日まで続けられている。上記の染織品は、いずれも伸展されて大小様々な架台に納めるか箆笥に納められている。幡類、天蓋、衣服、帳、



挿図27 明治の包みを解いた所



挿図28 新聞紙を間に挟んだ錦・綾・鰯鱈・金糸等



挿図29 水で湿らせて伸展した縁部と垂飾



挿図30 裂地の袷の間に入れた薄和紙の上に、分離片を伸展して貼付している所



挿図31 天蓋内面中央の錦裁文飾を伸展している所



挿図32 維持整理の完了に向けて（巻頭口絵図版参照）

方形天蓋 第19号の整理過程（南倉182）

覆など形のある染織品を整理するのに際して、当初は、和紙の裏打ちまでにして、裂地を補うなどの復元の補修は行わずに、修理が何時行われたかを記録し修理箇所が後世に伝わるようにし、後日必要となれば裏打ちを取り除いて再修理が出来るように合成樹脂系の接着剤は使用しないなどの方針のもとに、維持整理と呼ばれる整理が行なわれた。しかし、その後、展開仮整理と称される、裂地を湿らせて伸展するだけで、糸目を揃えたり、皺を伸ばして破れ目を部分的に和紙で裏打ちすることもほとんどないまま乾燥させて宝庫に還納する整理が行なわれるようになった。

ただし、展開仮整理と称される方法で整理された衣服や幡など比較的大きい染織品は、水分を含ませて展開して、薄和紙の上に伸展して乾燥し、鳥ノ子紙（厚手の和紙）の上に置かれているが、筋切れ個所に部分裏打ちが施されていないために、少しずつ崩壊して僅少な破片が動いているものが多い。そこで、部分裏打ちを施したり、一点一点を別々に畳紙など専用の入れ物に納めるような修理が少しずつ進められている。

おわりに

本稿において、形状の明らかな古裂類のみ点検目録に名称を記載されて、大多数のものは塵芥と呼ばれてそのまま放置されていたことや、明治時代に初めて塵芥が整理（分類整理）され、その後、復元整理から維持整理、そして展開仮整理へと進められたことについて、全体の流れを明らかにすることができた。その間に、多種多様の染織品が混在していることしかわからなかった多量の塵芥古裂が整理されて正倉院古裂に生まれ変わった。今では、正倉院の染織品は、明治時代以来それぞれの時期に整理に携わった先達の最善の努力とその時期に最新の研究や技術を駆使した整理事業の成果を集積したものを意味すると言っても過言ではないであろう。

そのような正倉院の染織品について、由緒や織り、染め、文様、素材、あるいは用途の面からではなく、整理事業から考えてみた。一世紀に及ぶ大事業の全貌を容易に明らかに出来るものではなく、およその展開を明らかにすることが出来たかどうかもおぼつかない。それでも、正倉院古裂と今後とも向き合っていくためには、整理事業の経緯や問題点についての考察は避けられないものであり、また、そのようなことを詳しく述べた例はほとんど無いので、今回敢えて取り組んでみた。

注

- (1) 正倉院古裂の調査は、奈良国立博物館と正倉院事務所と在外の専門の研究者により、文部省科学研究費交付金（総合研究）を受けて「正倉院裂の基礎的調査」(昭和25(1950)～27年研究代表者黒田源次)として行われたのが最初である。引き続き、4年目以降は正倉院事務所の事業として、古裂第1次調査が行われ(昭和28(1953)～37年(1962))、古裂第2次調査が行われた(昭和38(1963)～47年(1972))、平成2(1990)～3年には、繊維材質調査が行われている。その間に、下表の通り、錦綾、羅、染料、繊維（絹、麻他）の調査研究の成果が報告された。

「正倉院染織調査一覧」

調査項目名	調査期間	調査内容	既刊の報告書
古裂第一次調査	昭和28～37年	錦綾を中心とする染織総合調査 染料の科学分析調査	『書陵部紀要』第7～13号 『書陵部紀要』第11号
羅	昭和37～43年	羅の組織研究調査	『正倉院の羅』（佐々木信三郎著、 正倉院事務所編、日本経済新聞社、 昭和46年(1971)）
組紐	昭和43～45年	組紐の組織・色彩・文様研究調査	『正倉院の組紐』（正倉院事務所編、 平凡社、昭和48年(1973)）
古裂第二次調査	昭和38～47年	染料の科学分析調査 繊維素材の科学的調査	『書陵部紀要』第14、19号 『書陵部紀要』第26号
繊維（絹以外）	平成2、3年	繊維素材の科学的調査	『正倉院年報』第16号

(2) 正倉院の染織品の銘文中、楽舞装束の楽名・年代、調庸銘などは明治時代から既に知られていたが、大正3年からの本格的な整理に伴い次々に発見されたものは、最初、石田茂作編『正倉院御物年表』（『東洋美術特輯正倉院の研究』（1929、飛鳥園））の銘文の項目に発表された。その後、正倉院古裂の銘文は、松島順正編「正倉院古裂銘文集成（結）」（『書陵部紀要』第3号、1953）に一括して発表された。新発見の銘文を増補した松島順正編『正倉院寶物銘文集成』（1978、吉川弘文館）が出版されたのは近年になってからである。なお、最近の成果は『正倉院寶物1～10』（1994～1997年、宮内庁蔵版、正倉院事務所編、毎日新聞社）に発表されている。

(3) おそらく、正倉院古裂の整理事業について最初に具体的に紹介した出版物は、松本梢重著『正倉院雑談』（1947、奈良観光事業株式会社出版部）であろう。この本は、当時の保存管理を担当していた故松島順正氏の話聞き書きしてまとめたという体裁のもので、その中の「古裂整理の大事業」では、断爛や塵芥の具体的な整理方法として、櫃から取り出してきて、塵粉を払い落としてから水で湿らせて皺や反りを落ち着かせ、水を含ませながらピンセットにより経糸緯糸を揃えて、新聞紙の上に延べ広げて乾燥させた後、屏風装や古裂帖や軸装や玻璃装や函装に仕立てるとしている。この方法は、現在も行っている塵芥の整理方法と同様である。ただし、現在では出来るだけ水分が付かないように注意しながら皺や反りを伸ばし、水を僅かに含ませた筆先で経糸緯糸を揃えるようにしている。水に含まれる成分が裂地の染料や素材（絹や麻）に影響することのないように、イオン交換水を使用している。

『岩波写真文庫40正倉院（1）』（1951、岩波書店）には、仮宝庫の内部の様子や塵芥の詰まった櫃の様子が写真で紹介され、古裂帖の製作工程が写真図版で順を追って紹介されている。

松本包夫著『正倉院ざれ』（1982、学生社）は、筆者が「従来の書物にあまりとりあげられていなかった江戸・明治以後の保存と整理の話しにもかなりの紙面をさき、・・・」と記しているように、従来の刊行物の中で正倉院古裂の整理について最も詳しく紹介している。

青山茂編『正倉院の匠たち』（1983、草思社）は、正倉院事務所で長く古裂整理作業に従事していた故安藤重衛門氏（1947～1979に勤務）との対談が収載されている。そこでは、古裂の整理方法とともに、安藤氏等が立案して実践した戦後の整理方針をについて紹介されている。すなわち、復元するための補修を行わない（せいぜい和紙の裏打ちまで）、後世の人達が何時の修理かわかるようにする、糊で付けたところを取り外して再修理が出来るように合成樹脂系の接着剤は使用しないなどで、現在も踏襲されているものである。

(4) 和田軍一『正倉院夜話』（1967、日経双書）に、「正倉院宝物の整理の実況をみたフランスのゲーム博物館長ルネ・グルッセは、「正倉院ではいながらにして、毎日毎日が発掘である」といった。

古裂包みを開き、雑塵の筐底を払えば、何かが新しく発見される。」とあるように、正倉院の古裂整理は新発見や調査研究と結びついて理解されてきたといえよう。西村兵部「正倉院の綾」(『書陵部紀要第12号』(1960、宮内庁書陵部))に「帖装古裂あとまだ456冊(昭和35(1960)年8月現在)をのこし、・・・新資料発見の可能性はつよく、・・・この報告も中間的なものであることは筆者みずからも感ずることであり」とあるのは、古裂整理の進んだ範囲まで調査研究が及ぶことを示唆している。

- (5) この展覧会に出陳されたのは、整理済の染織品のほとんど全てに及ぶ屏風装122扇(献納屏風骨を再利用したもの53扇、下地骨を新造したもの69扇)、古裂帳36冊、軸装29巻、玻璃装82枚、その他、箱に納めた諸染織品24箱、大幡(灌頂幡)4旗である。この時、染織工芸家、有職家、美術史家のみならず、歴史学者や考古学者から一般の人々の間でも大きな反響を呼んだといわれる。16日間で2万5千人近い入場者を数えた。以上、正倉院事務所に残る当時の立案書類による。『東京国立博物館百年史』(1973、東京国立博物館)の略年表にも開催のことが記されている。

- (6) 松本包夫著『正倉院ざれ』(1982、学生社)によると(138~141頁)、大正・戦前は復元整理、戦後は維持整理に整理方針が変更されたといわれる。

- (7) 完形かそれに近いものは、各品を由緒や用途別に分けて数量を計ることが出来る。裂地片は、整理容器の個数や片々の枚数(点数)により数量を計ることも出来る。既整理染織品の概数を以下に示す。

完形かそれに近い整理済染織品は、献納宝物が染織屏風、屏風袋、薬物の袋、花氈を加えて約300点、大仏開眼会用品は伎楽面袋を加えて170~80点、聖武天皇御葬儀に関わる用品は40~50点、聖武天皇一周忌齋会用品は主に幡であるが約700点である。その他、調庸銘の残る縄や麻布など由緒のわかる染織品が200点以上あり(麻布は、裂地片と化していて、軸装や函装に整理されているものが多く、調縄は、完存品や部分を使用した残りのようなものもあるが、屏風装・軸装・古裂帖に整理された小断片が多い)、合計1400~500点に達する。整理済裂地片は、現時点で屏風装が542扇(古屏風325扇、新造屏風217扇)、玻璃装が536枚、軸装が257巻、帖装が907冊、函装が73個で、合計2千数百点が整理されている(裂地小断片まで数えれば20万点近い)。

- (8) 正倉院宝庫は、天平勝宝8歳(756)9月頃には既に完成していたと考えられている。光明皇后の献納宝物が大仏殿から宝庫へ移納されたことを検分した検遣使の署名のある天平勝宝8歳(756)9月22日付の文書断簡が存在することや、人参五十斤を天平勝宝8歳10月3日に施薬院へ出蔵したことが『出入帳』(北倉170)に記載されているからである。正倉院宝庫創建時、周辺には既に北倉代と呼ばれるやや大きい倉庫や小さい倉庫が十棟近く立ち並んでおり、堀で囲まれたその一郭は東大寺の正倉院と呼ばれていた。

その頃、造東大寺司や三綱所、東大寺周囲の院堂にもそれぞれ倉庫があった。ところが、兵火や朽損のため次々に無くなり、中世になると東大寺には正倉院宝庫と数棟の小さい倉庫しか存在しなかった。そして、崩壊した諸倉の納在品の中には、正倉院宝庫へ移納されたものも少なくない。

『東大寺要録』によると、天曆4年(950)6月に羈索院の双倉が朽損したために納物を正蔵三小蔵南端蔵、すなわち今日の正倉院宝庫の南倉に移したとある。そして、羈索院の双倉には朽ちた諸倉の什物が納められていたという。実際、正倉院には、『阿弥陀院阿弥陀悔過資財帳』に記されている品々と一致すると思われる宝物が伝わり、羈索院、戒壇院、小塔院、千手堂、吉祥堂などの什物であることを示す墨書のある宝物が存在する。さらに、北倉代に納められていたとされる大仏開眼会用物が正倉院に伝わっていることからみても、正倉院宝庫には、光明皇后の献納宝物以外にも、他から移納された様々な東大寺の什宝が伝来したと考えられる。

(9) 正倉院には、『延暦六年(787)六月二十六日曝涼使解』(北倉162)を始め、『延暦十二年(793)六月十一日曝涼使解』(北倉163)『弘仁二年(811)九月二十五日勸物使解』(北倉164)『斉衡三年(856)六月二十五日雜財物実録』(北倉165)『礼冠礼服目録断簡』(北倉166)(上記『斉衡三年(856)六月二十五日雜財物実録』の巻初部分の断片)『永久五年(1117)八月七日綱封蔵見在納物勘検注文』(中倉19正倉院塵芥文書第16巻所収「綱封蔵見在納物勘注五張」・『大日本古文書』編年文書第25巻)と、奈良から平安時代にかけての6巻の宝物点検目録が現存する。なお、『検定文』とその後の『検珍財帳』が6巻に先立ち存在したことが知られるが現存しない。最初の5巻は、北倉の点検目録で、献物帳所載品の点検目録である。その中に記されている染織品の中で現存するものは、袈裟(北倉1) 白練綾大枕(北倉46) 御軾(北倉47) 繡線鞋(北倉152)をはじめとするものである。最後の『綱封蔵見在納物勘検注文』は、白河上皇の命により綱封倉すなわち南倉を点検した目録で、奥書に、ここに記されたものはそれまでの点検目録には記されていない品々で、重物の多くは勅封倉に移動してあるので綱封倉に今存在するものを点検したと記されている。最も古い南倉の点検目録である。そこには、染織品について「古破損幡」「大廣赤褥」「舞装束但破損」「破損幡」「破損衾并褥小」「破損幡并白布」などが約60合の櫃に納められていたことが記されている。すなわち、その頃既に染織品は破損していたのである。

鎌倉から江戸時代にかけての開封点検目録が存在し、今日まで伝来した染織品が各時代にどのような状況にあったかを推測することができる。

『建久四年(1193)八月二十五日東大寺勅封蔵開検目録』(『続々群書類従』第16雑部所収)は、勅封倉の雨漏りの修理のために、南倉へ移された北・中倉の宝物の点検目録である。諸韓櫃(唐櫃)毎に収納品を記載している。染織品では、袈裟や衣服に加えて、袋、覆、茵、打敷などが、主に他の宝物に付属するものとして記されている。破損を示す記載がないのは、重物と称する程であるから塵芥に類するものは存在しなかったのであろう。

『寛元元年(1243)閏七月二十三日東大寺勅封蔵御物目録』と『弘安十一年(1288)四月二十三日東大寺勅封蔵重宝目録』(両方共『続々群書類従』第16雑部所収)は、勅封倉の点検目録であるが、前者は諸辛櫃(唐櫃)の内容を逐一記されておらず、後者は後深草上皇御覧の宝物の目録である。どちらも、いわゆる染織品は記載されていない。

『慶長十七年(1612)十一月十三日東大寺三蔵御宝物御改之帳』(『続々群書類従』第16雑部所収)は、東大寺塔頭の僧3人が慶長15年(1610)7月21日に北倉の床を破り宝物を盗み、それが発覚して犯人が捕らえられ、徳川家康の命令で勅封倉(北・中倉)の宝物点検が行われた時の目録である(『慶長十九年薬師院実祐記』(『続々群書類従』第16雑部所収)による)。2倉を上下に分け、各場所の長持(唐櫃)に「い・ろ・は・・・」と「一・二・三・・・」の符号を付けてその内容を記している。染織品は、北倉に「幕之縄白赤入」「白もうせん」「白赤もうせん」「走絹之幕」「もうせん但紋有」「唐織之琵琶袋」「巻唐布」などがあり、中倉に「色々着類」「色々御しとねの道具」「色々錦之幕」「色々古幕」「色々布幕」などが記されている。目録に付けられた付箋には、北倉の長持34個は東大寺による修理の目的で綱封倉である南倉に移され、もと南倉にあったそれほど重要ではない品物が北倉に移されたとある。なお、今では主として唐櫃(及び和櫃)と称しているが、奈良時代には韓櫃、平安時代末から鎌倉時代には辛櫃と記されていて、ここにおいて長持と記されているが、本稿では、各時代の呼称を特に考慮せずに用いているので、文中、櫃を指すことが統一されていない。なお、櫃に符号を付けたのもこの時が最初である(明治以後は再び号数を付けている)。

『寛文六年（1666）三蔵宝物目録』（寛文6年（1666）の目録とされる「東大寺三倉入日記正倉院御道具目録」と巻頭に書かれた正倉院事務所の写本を参考にした）は、寛文6年（1666）3月4日に開封し同7日に閉封した時の中倉と南倉の目録である。慶長17年（1612）の目録と比較すると、慶長の目録にある北倉階下の長持は、寛文6年の目録の南倉階下のものと一致している。慶長17年の目録にある北倉階上の長持は、寛文6年の目録の南倉階上のものと一致し、南倉のものとしてさらに数個の長持が記載されている。符号の一致している長持の納在品は同じである。すなわち、慶長の目録の付箋の通りに北倉の長持は南倉に移され、南倉の品物が北倉に移されていると推定できる。寛文の目録にある染織品は、慶長の目録のものとほぼ同じである。

- (10) 元禄6年（1693）の開封記録は『東大寺正倉院開封記』で、そこには5月16日から24日にかけての中倉階下の長持100個と南倉階下の長持31個の点検目録が記されている。北倉の品物の記載はないが、それは、慶長17年の点検目録にあるように、慶長の点検後、北倉の宝物が東大寺による修理の目的で網封倉である南倉に移され北倉にはもと南倉にあったそれほど重要ではない品物が移されていたからであろう。

慶長17年（1612）の目録と寛文6年（1666）の目録を比較すると、慶長の目録の北倉と寛文の目録の南倉の内容がほぼ同じで、北倉から南倉へ長持が移動したと推定される。寛文6年（1666）から元禄6年（1693）までの宝庫内の長持の移動を検討するために、中倉階下と南倉階下の長持を点検している寛文6年の目録と元禄6年の目録の中倉階下と南倉階下について比較すると、元禄の目録に寛文の目録にない「幡朽損数多」「古幡ノ切」「古布」「古絹」「古布切」「古絹切」「塵芥」「布ノ朽損」などが記されているなど、同じ倉の納在品の内容が一致していない。寛文6年（1666）から元禄6年（1693）までの27年間に3倉間における宝物の移動があったようである。さらに、染織品について、断爛と考えられる「古布」「古布切」「古絹切」や塵芥と考えられる「塵芥」「布ノ朽損」が元禄の目録のみに記されているが、寛文6年（1666）の開封点検の時点ですでに染織品の断爛や塵芥が納められた長持が存在したが、その時に点検された倉には納められていなかったか、点検されて目録に記されることがなかったと推定される。

『正倉院御開封記草書』と『東大寺正倉院開封記』は、『続々群書類従』第16雑部に収録されているものを参照した。

- (11) 南倉148 - 35緋絁六帖は、1枚1枚がこの覆の裏裂（赤絁2枚を縦に縫い綴いでいる）を構成する赤絁と寸法形状が一致している。紐の縫い付けた位置も同様である。ただし、縫製した針穴の跡などの厳密な調査は行なわれていない。
- (12) 東大寺屏風の納められていた天保時の櫃の蓋表には「古切御屏風 二畳十二扇 東大寺 公物」とあり、同櫃の蓋裏には、天保7年（1836）6月20日の正倉院閉封の前の月の5月に、献物帳記載の屏風を再現して古裂貼り交ぜ屏風を製作した旨が記されている。
- (13) 天保4年（1833）の開封点検目録である『正倉院御宝物目録』には、北倉の長持（この目録では辛櫃とも記されている）55個と中倉の長持37個と南倉の長持27個の合計119個の点検記録が記され、塵芥その他は開けていないので省略するとしている。これは、現在知られている点検目録の中では、3倉にわたり宝物点検が行われた最初のものである。『正倉院宝物御開封事書』によると、10月18日に開封され当日から24日までの7日間に合計133個の長持の点検を行ったとある（事書には、長持の符号は記されているが、内容物と3倉の区別は記されていない）。「塵芥その他」は点検していないとみなされるから、点検を行った長持数が目録と事書で異なっていることになる。従って、目録には全ての宝物が記されていないと考えられる。

天保4年(1833)の開封点検目録と元禄6年(1693)の開封点検目録を比較すると、後者は、中倉階下の長持100個と南倉階下の長持31個の合計131個の長持の点検記録であり、元禄6年(1693)から天保4年(1833)までの約140年間に中倉から北倉へ多数の宝物が移動したのではないだろうか。両度の点検目録を染織品について比較すると、一部の長持については符号の一致するものは収納品も一致し、納められている倉も一致している(「糸」「も」「ぬ」「む」の符号のものなど)。天保の目録に「御衣ノ切」「御衣朽」「幡切」「古切」「布切幕」「塵芥」などと記されている長持の符号と同じ符号の長持は元禄の目録にみえないが、それら断爛や塵芥と考えられるものとほぼ同様のものが元禄目録にも記されているから、同じ長持の符号を変更したのかもしれない。

『正倉院宝物御開封事書』と『正倉院御宝物目録』は、『続々群書類従』第16雑部に収録されているものを参照した。

(14) 橋本義彦「『東大寺勅封蔵目録記』雑考」(『正倉院文書研究』9(正倉院文書研究会編、2003、吉川弘文館))に、鎌倉時代の開封点検目録の詳細な検討が行なわれている。

(15) 松本包夫『正倉院ざれ』(1982、学生社)の124～7頁には、「元禄開検時にはまだかたちを保っていたのに、天保時代にはもはや原形もとどめぬ残片(すなわち塵芥)と化してしまったものが目立つ。」とある。しかし、『続々群書類従』第16雑部に収録されている目録を比較する限り、元禄と天保の目録に記された染織品は類似しているのも、次第に塵芥化が進んだことは確実であるとしても、約140年間にそれ程急速に破損や朽損が進んだとは思えない。

(16) 明治5年(1872)の開封時に、正倉院宝物の点検は8月12～18日の7日間に行われた。閉封は数日後の8月23日であり、この時の開封次第は『奈良の筋道』(蜷川式胤日記)に記されている。『壬申検査古器物目録』(正倉院の部)は、3倉全体を開封点検した目録で、合計190個の長持(及び唐櫃)の点検を行っている。そのうち北倉の35櫃は塵芥とされている。「古絹切」「浅黄唐布」「白絹切々」「古切」「塵芥」「古切塵芥」「古絹綾塵芥」「古絹破裂」「古布破裂」など記されていて、天保4年(1833)の目録とは表記が異なる。

『壬申検査古器物目録』(正倉院の部)は、樋口秀雄編「資料公刊1～3壬申検査古器物目録正倉院の部」(『ミュージアム』第255～257号(1972、東京国立博物館))を参照した。また、『奈良の筋道』は、安藤更生「明治5年正倉院開封に関する日記」(『東洋美術特輯正倉院の研究』(1929、飛鳥園))、由水常雄「明治5年の正倉院開封目録」(『美術史』80(1971、美術史学会編))などに一部が抜粋されて収録されており、米崎清美編『蜷川式胤奈良の筋道』(2005、中央公論美術出版)には、全体が活字本として刊行されている。

(17) 松嶋順正『正倉院よもやま話』(1989、学生社)の41～52頁参照。

奈良博覧会とは、奈良町の有志の申し出により正倉院宝物を始め奈良の諸寺に伝わる宝物を東大寺大仏殿の回廊に数百点並べて展示するという破天荒なものであった。明治8年(1873)3月1日～5月20日に開催された第1回から明治9、11、13年の合計4回にわたって、多数の染織品を含む正倉院宝物が一般に公開された。

(18) 『東京国立博物館百年史』(1973、東京国立博物館)の163頁及び『同書資料編』の620頁参照。

(19) 『東京国立博物館百年史』(注18に前掲)の166頁及び『同書資料編』の621、622頁参照。

(20) 『正倉院御物目録』(明治41年10月宮内省寶器主管より引継ぐとされるもの)に、「錦繡綾袍等玻璃板夾四箱二箱奈良博物館納付」と記されている。

(21) 例えば、七条織成樹皮色袈裟(北倉1)、呉女背子(南倉124-43)、大幡の脚端飾(南倉184)、吉字刺繡飾方形天蓋(南倉181)の刺繡垂飾などの部分が頒布されている。

- (22) 『東京国立博物館百年史』(注18に前掲)の166頁及び『同書資料編』の622頁参照。
- (23) 『東京国立博物館百年史』(注18に前掲)の159、160頁参照。
- (24) 松島順正『正倉院よもやま話』(注17に前掲)の37～42頁参照。
- (25) 小野善太郎『正倉院の栞』(1920、西東書房)の20～21頁、木内半古「正倉院御物修繕の話」(『東洋美術特輯正倉院の研究』(1929、飛鳥園))の117～121頁、安藤更正『正倉院少史』(1947、明和書院)の88～89頁参照。
- (26) 残欠は、破損は大きいがもとの形状を窺い知ることのできる染織品。断爛は、もとの形状や用途の不明な古裂片。塵芥は、古裂小断片や微小片。塵粉は、絹や麻などの繊維素材の粉末。
- (27) 御物整理掛における染織品の整理は、『正倉院ざれ』(注6)参照)に述べられているように、ほとんど手が付けられず大まかな区分に留まったと言われていた。しかし、東野治之編『東京国立博物館蔵正倉院御物修繕還納目録 - 問題と翻刻 - 』(2002、奈良大学文学部文化財学科)により、御物整理掛における染織整理の実態が明らかになった。「正倉院御物修繕還納目録」には、薬袋及び裏(北倉)(明治26(1891)36年還納) 袷袋(北倉1) 白練綾大枕(北倉46) 綾羅錦繡雑張112種(南倉179)(以上明治37年(1904)還納) 御軾(北倉47)(明治35年(1902)還納) 鏡箱嚢(南倉)などが修理されたことが記されている。なお、同書収載の「正倉院御物未修繕還納品目録」には、未修理のまま新聞紙に包まれ櫃に納められていた楽服や幡類などの染織品が列記されている。
- (28) 『東京国立博物館百年史』(注18に前掲)の380頁参照。
- (29) 松島順正『正倉院よもやま話』(注17に前掲)の216頁参照。
- (30) 正倉院事務所に残る当時の立案書類による。
- (31) (注5)参照。
- (32) 全18巻のうち、第1～15号は、昭和3～19年に帝室博物館発行、第16号は、昭和26年発行で国立博物館編集、第17号は昭和28年発行で東京国立博物館編集、第18号は、昭和30年発行で東京国立博物館編集。
- (33) 正倉院事務所に残る当時の立案書類による。
- (34) 『東京国立博物館百年史』(注18に前掲)の418頁参照。
- (35) この展覧会に出陳されたのは、屏風装498扇(献納屏風骨を再利用分325扇、下地骨を新造分173扇) 古裂帳340冊、軸装154巻、玻璃装140枚、箱に納めた諸染織品37箱、大幡(灌頂幡)6旒、摺布屏風袋43口、布衣服類43件約60点、布幟及び袋類16点、白布及び色布62巻と帖冊3冊、未整理古裂若干である。
- (36) 正倉院事務所に残る当時の立案書類による。
- (37) 『書陵部紀要』第1号(1951、宮内庁書陵部)から同第30号(1978、宮内庁書陵部)の「正倉院年報」、『正倉院年報』第1号(1979、正倉院事務所)から同第18号(1996、正倉院事務所)及び『正倉院紀要』第19号(1997、正倉院事務所)から同第27号(2005、正倉院事務所)の「年次報告」に昭和22年以降の古裂整理の成果が報告されている。
- (38) 大正時代から、米糊(続飯)などの強い糊や合成樹脂系の接着剤は用いられていない。生麩糊の濃度が高いものを強い糊と称している。ちなみに、戦後、粉状化する古裂を合成樹脂で固める実験が行われたことがあるが、固まったものがひび割れ、透明度が無くなり褐色に変色するなど経過が非常に悪いため、古裂数片の実験で終わり、古裂整理方法に採用されなかった。
- (39) 平成2年に、鰯鱒屏風画面残片を新造屏風の画面に貼付した鰯鱒屏風が2扇製作されたが、これは従来の屏風装とは別系統の整理である。